



TITLE:

植民地都市の社会史

AUTHOR(S):

加藤, 剛; 深見, 純生; 泉田, 英雄

CITATION:

加藤, 剛 ...[et al]. 植民地都市の社会史. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 1: 37-43

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187412>

RIGHT:

植民地都市の社会史

1. 研究組織

研究代表者：加藤 剛（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：深見 純生（摂南大学国際言語文化学部・助教授）

泉田 英雄（筑波大学芸術学系・講師）

2. 研究のねらい・目的

本研究は、重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」の主要研究項目「地域性の形成論理」に関連する課題として、主として東南アジアの植民地都市を対象として実施するものである。

本研究のねらいは、東南アジアの植民地都市、なかんずくオランダ領東インドのバタビア（現インドネシアのジャカルタ）を対象として、東南アジアの地域性の形成論理に関するモデル構築の可能性を探ろうとするところにある。東南アジアにおける地域性の形成は、東南アジアの内なる世界と外来文明との相互作用のなかで進行した。内世界と外文明が交わる磁場を形成したのは都市である。なかでも、現代東南アジアの地域性をも考察の射程に入れた場合、国民国家形成に先立つ植民地時代の都市の研究が、きわめて重要な位置を占める。

こうした問題関心に導かれて、本研究では、これまであまり顧みられることのなかった東南アジアの植民地都市を研究の中心に据え、東南アジアの地域性の形成論理との関係で、次の三つの研究目的を達成しようとする。

- (a) これまで東南アジア研究であまり試みられなかった社会史のアプローチを採用し、そのための新たな資料の発掘と既存資料の新たな利用法を考える。
- (b) 植民地都市の事例としてバタビアに焦点を当て、研究組織メンバーの関心に沿って、植民地都市世界を精神世界、権力構造、建築空間という三つの位相に分けて多角的に考察するとともに、植民地都市の全体的なイメージの構築を目指す。
- (c) バタビアという個別事例を手懸かりとしながら、植民地都市を磁場として進行し、現代東南アジアにつながるような地域性の形成論理の具体像を明らかにする。

以上の目的のために、平成5年度から6年度までの2年度の計画を立て、第一年度は主に(a)の目的を、第二年度は(b)、(c)の目的を達成する。

本研究の特色は以下の三点に集約される。

第一は、研究組織を構成するメンバーがいずれも東南アジア社会および都市での豊富な調査経験を持つことと、メンバーの構成が、社会学、歴史学、建築学と、社会科学、人文科学、自

然科学にまたがるきわめて学際的な構成をもつことである。三つの異なる分野の研究者が、東南アジアの植民地都市、なかんずくバタビアという比較的限定された共通の「場」を分かち合い、この「場」での密度の濃い知的交配をとおして東南アジアの地域性の形成論理にアプローチする、これが本研究の第一の特色である。

第二の特色は、東南アジア研究においてこれまで比較的等閑視されてきた植民地都市を研究の中心に据え、内世界と外文明の交わる磁場としての都市の考察をとおして、地域性の形成論理を考えようとするところにある。ややもすると東南アジアの地域性は、農村部における“伝統的な”慣行や仕きたり、人間関係と同等に考えられがちである。しかし、本研究は、都市こそが地域性の形成の中心部分に位置するものであるとの立場に立つ。

これまでの東南アジアの都市研究は、そのほとんどが現代都市、それも都市問題の研究が中心であった。その結果が示すところは、東南アジアの地域性ではなく、「発展途上地域」としての地域性であり、固有性である。本研究では、国民国家から形成される現代東南アジアの歴史過程に多大の影響を与えた植民地都市にまで研究の視野を引き戻し、植民地都市を文学、都市行政機構、建築という異なる位相から照射するとともに、植民地都市をより包括的に理解しようとするものである。

第三に、地域性の形成論理は時間の記録であると理解し、歴史的なアプローチを強調する。それも伝統的な歴史学の方法論に囚われることなく、現在「社会史」と総称されるところの、人間の生活世界により密着可能な歴史的アプローチを強調する。したがって利用される資料も、従来の植民地文書に加えて、小説、都市行政法、地図、写真とさまざまである。こうした社会史的取り組みは、東南アジア研究、それも東南アジアの都市研究においてもっとも遅れている分野であるばかりでなく、社会史のアプローチこそが、課題の「地域性の形成論理」を考えるうえで、もっとも有効な歴史的アプローチであると信ずる。

研究組織の全メンバーは、すでに東南アジア社会および都市を対象とした多くの調査に従事しており、いずれも地域研究におけるエキスパートである。研究代表者の加藤は、これまで京都大学東南アジア研究センターを中心に数次にわたって行われてきた科学研究費補助金による調査に参加している。このうち、東南アジアにおける人の移動、東南アジアの都市に関する調査としては、「熱帯島嶼域における人の移動に関わる環境形成過程」、「東南アジア型都市文明の形成」、「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」などがある。平成4年度からは、「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」（代表者：加藤剛）の課題のもとに、3か年の計画でフロンティア空間としての都市を考察に入れた島嶼部東南アジアの

動態的研究を推進中である。

本研究は、こうした海外学術調査の成果を踏まえて準備され、現在進行中の課題とも密接に連携して行われるが、それとともに、他大学の東南アジア研究者との共同研究を意識的に意図しながら計画されたものである。知識と経験の知的交配は、重点領域研究の「総合的地域研究の手法確立」のために必要不可欠だと考えるからである。

研究分担者の深見は、東南アジアの都市に関する深い歴史的パースペクティブを有している。京都大学東南アジア研究センターを中心に行われた科学研究費による研究プロジェクトの総合研究(A)「中国資料に基づく東南アジア国家成立に関する総合研究」(昭和57年度)および海外学術研究「熱帯島嶼域における人の移動に関わる環境形成過程」(昭和59年度)にも参加し、東南アジアの都市についての洞察を深めてきた。深見の研究成果は、島嶼部東南アジアの港市国家シュリーヴィジャヤ、イスラム同盟に代表される民族運動と植民地都市などについての学術論文として公表されている。近年では、植民地支配の性格をより本質的に理解するために、都市行政を含む植民地行政機構そのものに関心を広げており、その最新の成果が論文「ジャワ島地方行政区画」(1991)である。

もう一人の研究分担者の泉田は建築学を専攻し、一貫してアジアの植民地都市の建築様式の研究に従事してきた。科学研究費補助金一般研究(C)「アジアのコロニアル建築に関する研究」(平成2～3年度)や「東洋建築史学史の研究」(平成4～6年度)においてアジアの植民地建築様式に関する理論的理解を深めるとともに、現在申請中の海外学術研究「アジアのコロニアル建築に関する研究」、さらには平成4年度三菱財団研究助成「遺構に基づくバタヴィア都市形成史に関する研究」などをとおして、フィールド調査に基づく植民地都市研究にも積極的に取り組んでいる。これらの研究プロジェクトの代表者が総て泉田であることからわかるとおり、若手建築学者のなかで、今もっとも精力的に東南アジアの建築様式の研究を推進している研究者である。

以上のような東南アジアの都市に関する多くの調査が、本研究の実施基盤となっている。

3. 平成5年度の研究経過

上記の目的を達成するため、平成5年度は研究組織の各メンバーによる資料収集を遂行するとともに、全メンバーが参加する研究会を数回開催した。資料収集については、次の三点についての成果があった。

(a) 摂南大学が所蔵する文献『政庁要覧』より、バタヴィアの都市行政機構、行政規則に関

するデータのコンピューター入力化に努めた。

(b) 東京大学工学部には、バタビアに関する地図および建築関係の文献が所蔵されており、その一部複写に努力した。

(c) 今世紀初頭からバレ・プスタカ（文字どおりには「図書局」）によって出版されたインドネシア語小説の収集も試みたが、挿絵の重要性に鑑み、初版本を探したところ、東京外国語大学図書館に数冊所蔵されていたのを除き、所期の目的を遂げることができなかった。

(c)の問題をいかに克服するかは、来年度に課せられた課題である。

研究会は、年度をつうじて4回開催した。それぞれの総合タイトルは、「東南アジア海域世界：スールー地域」「植民地都市の行政・言語・政治」「植民地都市の建築空間」「植民地文学の映す都市」で、毎回3人の話題提供者を招き、泊り込みで行った。研究会には、研究組織のメンバーだけではなく、外部からの話題提供者や出席者を募るよう努力し、この点では、小さなグループながら充実した研究会をもつことができた。

これらの研究会について詳述すると、以下のようになる。

(1) 「東南アジア海域世界：スールー地域」

日 時：平成5年7月1日

場 所：京都大学東南アジア研究センター

植民地都市を考察する前に、東南アジアのなかでも、植民地都市の存在しなかったフィリピンのスールー海域世界についての知見を深め、その後の研究会のための共通のバックグラウンドにしようと企画されたものである。

話題提供者とトピックは以下のとおり。

門田 修（フォトジャーナリスト）「スールー海の人々とその生活」

鶴見良行（龍谷大学）"The Meaning of Landscape"

James F. Warren (Murdoch University, CSEAS, Kyoto University), "Perspectives, Sources and Opportunities for the Study of Maritime Southeast Asian History"

研究会は、18世紀から現在までのスールー海域世界を概観するもので、植民地都市との関係でいえば、外部権力の浸透を許さないようなこの地域の生態基盤と、それに基づく経済構造が、植民地都市の不在を説明する要因として議論された。

(2) 「植民地都市の行政・言語・政治」

日 時：平成5年9月24日～26日

場 所：長崎市

植民地都市の多様な側面を議論しようと、インドネシアの都市について2人、ビルマの都市について1人の研究者を招待して開催したものである。具体的には、

深見純生（摂南大学）「バターフィアの行政」

山口真佐夫（摂南大学）「ジャカルタ方言のモルフォロジー」

伊東利勝（愛知大学）「植民地都市マングレー」

この研究会では、植民地都市のきわめて流動的、動態的側面が強調された。植民地都市というと、確固と整備された制度を連想しがちであるが、行政機構、都市で形成される言語、あるいは政治的理想郷のイメージといった多様な側面から考察しても、植民地都市は不断に変容するものであるとの認識が重要であることが指摘された。

(3) 「植民地都市の建築空間」

日 時：平成6年1月21日～23日

場 所：金沢市

植民地都市を、たんに政治や社会、経済の側面から考察するのではなく、建築空間的表現としても考えてみようというのが、この研究会の目的であった。具体的には、

田原直樹（兵庫県立人と自然の博物館）「ジョクジャカルタの都市発展と居住空間の変容」

泉田英雄（筑波大学）「植民地におけるヨーロッパ人居住者の住宅建築」

ヨハネス・ウィドド（東京大学）「オランダ植民地時代のジャワのある華人役人の自伝」

この研究会では、居住空間としての植民地都市は、決してアモーフな存在ではなく、人種によって都市の居住地がかなり明確に分かれているだけでなく、その一つ一つの建築様式には大きな時代の流れを反映した変化が存在し、それはたんに建築というハードな側面だけでなく、たとえば中華街の統治の様式にも反映されていることが明らかになった。

(4) 「植民地文学の映す都市」

日 時：平成6年2月18日～20日

場 所：京都大学東南アジア研究センター

植民地都市の捉え方は、同一都市に住んでいる人の間でも、当然のことながら違うであろ

うことが想像される。この研究会では、3種類の文学をとおして、このことを考えようとするものである。具体的には、

ウィレム・レメリンク（日蘭協会）「オランダ植民地文学にみる都市」

北野正徳（インドネシア文学研究家）「華人文学にみる植民地都市」

加藤剛（京都大学）「インドネシア文学にみる植民地都市」

この研究会で明らかになった知見の一つは、20世紀前半のオランダ領東インドをみるかぎり、オランダ人、華人、インドネシア人は、同じ植民地都市という空間のなかに居住しているながら、ごくわずかの例外を除いて、お互いの小説のなかには住んでいないということである。つまり、主観的に捉えられた植民地都市というのは、おそらく一つの実体としては把握困難なのであろうということである。

上記研究会以外に、研究打ち合せ会を1回、他班との合同研究会を2回開催している。総じて、満足 of いく研究活動を遂行することができた。

4. 研究の成果とフロンティア

これに関連した事項は、すでに前項で述べているので、ここでは多くを述べない。今年度の研究では、植民地都市のもつ多様な側面を、総花的にレビューすることができた。来年度の課題は、これらをどのようにまとめていくかである。

5. 今後の課題

来年度は、次のような目標を立てている。

資料収集の面では、主として視覚的資料の収集に力を注ぎたい。具体的には、バタビアに関する写真、挿絵、旅行案内書、絵葉書などである。視覚的資料は、植民地都市の建築空間（泉田担当分野）を理解するのに役立つばかりでなく、植民地都市の精神世界（加藤担当分野）、権力構造（深見担当分野）を多義的に把握するためにも、きわめて有効な資料でありながら、これまでほとんど利用されることがなかった。

研究打ち合せ会は、平成5年度と同じ要領で年4回開催する。このうち2回は、重点領域の計画研究班「地域性の形成論理」との合同研究会を開催したい意向である。さらに、本研究班の課題に関係する専門家を交えて、比較的規模の大きな研究会を京都で開催する。

以上の2か年の研究の成果は、『植民地都市の社会史』という報告書として刊行する予定である。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

加藤 剛

「民族誌と地域研究——『他者』へのまなざし——」矢野暢編『講座現代の地域研究第1巻 地域研究の手法』弘文堂, pp. 97-137, 1993.

「飼育されるエスニシティ」矢野暢編『講座現代の地域研究第3巻 地域研究のフロンティア』弘文堂, pp. 153-192, 1993.

深見純生

『日本占領期インドネシア年表』（深見純生編）インドネシア史研究会, 428pp., 1993.

泉田英雄

「底下空間と連続歩廊について 東南アジアの植民地都市と建築に関する研究 その2」『日本建築学会計画系論文集』（平成6年掲載予定）